

Modality of Inversion Exclamatives(cont.)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3913

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



倒置感嘆文のモダリティ (続き)

河野 武

0. 序論

英語の「倒置感嘆文」とは、次の例のように、yes-no 疑問文と共通の主語・助動詞倒置を伴う感嘆文を指す。

- (1) Is he mad!
- (2) Isn't he mad!

上に示すように、この種の感嘆文は統語的には疑問文と並行的に肯定形と否定形をもつ。しかし、この種の感嘆文は共に 'He is so mad' のような命題内容を持ち、次のようなプロトタイプ感嘆文（すなわち how/what を伴う感嘆文）に対応する（Quirk et al. 1985: 825 参照）。

- (3) How mad he is!

過去の研究では、倒置感嘆文は対応する疑問文とは別個の統語的・語用論的特性をもつとする見方（McCawley 1973, Fillmore 1998）がある一方で、倒置感嘆文は基底に修辞疑問文ないしはエコー疑問文をもつとする見方（Wierzbicka 1991, Bolinger 1989, Goldberg and Giudice 2005）がある。このような考察を踏まえつつ、河野（2007）では、倒置感嘆文は基底に話し手の自問自答のプロセスが介在することを提案した。すなわち、話し手はまず自分に向けて Is he mad? ないしは Isn't he mad? のような純然たる問いを発し、自ら <Of course, he is> のような答えを引き出すとみなすのである。自答の内容は文脈上聞き手と共有されているか、共有されうるとみなされているかのいずれかであり、ここに感嘆文としての感情的スタンスが表明される余地が生ずると思われる。

本論では、河野（2007）の枠組みをさらに精緻化するために、倒置感嘆文

とプロトタイプ感嘆文との比較を通して感嘆文としての特異性を明らかにし、さらに倒置感嘆文と関連づけられる修辞疑問文との相通性と段階的差異を捉えてみたい。

1. 倒置感嘆文とプロトタイプ感嘆文

倒置感嘆文は、感嘆文としての共通の特性を備えている一方で、独自の特性も持っている。以下、倒置感嘆文をプロトタイプ感嘆文と対比して共通性と相違を確かめたい。

まず、共通性について述べておきたい。第一に、Michaelis and Lambrecht (1996) に依れば、倒置感嘆文は他の様々な形式の感嘆文と共通に、i) Presupposed Open Proposition, ii) Scalar Extent, iii) Assertion of Affective Stance: Expectation Contravention によって特徴づけられる。i) は前提の開命題であり、(1), (2), (3) に即して言えば ‘He is mad to X extent’ のような内容を表す。(ここで、倒置感嘆文は how のような程度に言及する明示的な標識をもたないにもかかわらず、意味的には程度概念を含んでいることに注目したい。) ii) の尺度の範囲は、特定の個を（やや漠然とではあるが、文脈的に推論可能な）尺度上の特定の点に位置づけることである。iii) は期待が裏切られたことについての話し手の感情的スタンスの主張（くだいて言えば、何がしかの「驚き」）を指し、問題となる尺度の値が予想外に高いこと、(1)～(3) では彼が予想外の怒りを呈していることを表す。

第二に、プロトタイプ感嘆文と同様に、倒置感嘆文は質問ないしは答えの発話とはなり得ない。次の例を参照されたい¹。

(4) A: How very tall he is!

B: *Seven feet./ He really is!/ Indeed!/ No, he's not! (Zanuttini and Portner 2003: 47)

(5) A: Boy, is he mad!

B: Yes, he is./ He really is!/ Indeed!/ No, he's not!

(6) A: How tall is Tony's child?

B: *How very tall he is! (Zanuttini and Portner 2003: 48)

(7) A: How mad is he?

B: *Boy, is he mad!

感嘆文には、前述の「前提の開命題」と「尺度の範囲」が含まれてはいるが、wh 疑問文 *How tall is he?/How mad is he?* とは異なり尺度の範囲を特定することを相手に求めるものではない。したがって、そのような方向に沿った答えは不適切となるが、相手の「感情的スタンス」に同意・不同意を表すことはもちろん自由である。(4)・(5) はそのような事実を示す。(ここで、(5b) の *Yes, he is* は同意としては適格であるが、質問への答えとしては不適格となることに注意。) さらに、(6)・(7) が例証するように、感嘆文は答えの発話としては失格である。これは、明らかに、感嘆文が一般的に命題の真偽性判断に関わる〈主張〉を表さないためである (Sadoc and Zwicky 1985: 162)。この点で (典型的な) 平叙文とは対照的である。感嘆文の眼目は、言うまでもなく、話し手の感情的スタンスの表明にある。

倒置感嘆文は wh 感嘆文とは様々な異なりを示す。第一に、感嘆文にはしばしば間投詞の *boy, wow, god* 等の感情的スタンスの指標が現れるが、wh 感嘆文においてはいずれの環境においても随意的であるのに対して、倒置感嘆文においては独立文では随意的であるが埋め込み文では義務的である。次の例を参照されたい。

- (8) a. *Boy/ø, how mad he was!*
 b. *Boy/ø, were we in for it!*
- (9) a. *I knew boy/ø, how mad he was!*
 b. *I knew that boy/*ø, were we in for it!* (Green 1976: 394)

倒置感嘆文は、埋め込み文においては、主語・助動詞倒置を伴うにもかかわらず補文標識の *that* を取るアンビバレントな構文であり、*boy* のような間投詞に支えられてかろうじて感嘆文として機能しているものと解せる。倒置感嘆文はほぼ凍結した構文であり、主節現象の構文の中でも埋め込み条件がもっとも厳しい類に属するものと言える (Green 1976 参照)²。

第二に、上とは別の感情的スタンスの指標である主節 *It's amazing* との共起可能性の相違がある。(以下 (10)~(13) のそれぞれ a の容認可能性判断は Zanuttini and Portner 2003: 47 の判断を投影したものである。)

- (10) a. It's amazing how mad he is!
 b. *It's amazing that boy, are we in for it!
- (11) a. *It isn't amazing how mad he is!
 b. *It isn't amazing that boy, are we in for it!
- (12) a. *Is it amazing how mad he is?
 b. *Is it amazing that boy, are we in for it?
- (13) a. Isn't it amazing how mad he is?
 b. *Isn't it amazing that boy, are we in for it?

(10b) が (10a) と並行的に It's amazing のフレーム内での埋め込みを受け入れない理由はないと思われるのに、実際には不適切な発話となる。その原因は倒置感嘆文の凍結性によるか、埋め込み節内では義務的要素である boy と共起することで感情的スタンスが過剰に表出されることによるかのいずれか(ないしは両方)であろう。(11)・(12)に見られるように、上位節が否定や疑問の対象になった場合は、wh 感嘆文も倒置感嘆文も容認されない。一方で、(13)におけるような否定疑問の環境では、倒置感嘆文は一貫して埋め込みを拒絶するが、wh 感嘆文は許容度が改善される。これは、否定疑問文が相手から肯定的な答えを引き出す誘発的疑問を表すためであり、次のような付加疑問文に見合うモダリティ表現を含んでいることによると推測される。

- (14) a. It's amazing how mad he is, isn't it?
 b. How mad he is, isn't he?

(14a) と (14b) の違いは感情的スタンスが顕示的であるか非顕示的であるかに遡れる。付加疑問が関与するのは、一見 (14a) では感情的スタンスを表す上位節であり、(14b) では命題内容そのものであるように見えるが、問題となる尺度の値が予想外に高かったことへの感情的スタンスは感嘆文に内在化されていると見なすべきである。したがって、(14b) では、事態そのものの記述と事態への心的態度の両方を含めた話し手の認識について相手の同意を求める発話になっている (Huddleston and Pullum 2002: 922 参照)。

倒置感嘆文と wh 感嘆文との隔たりを示す第三の性質として、次のような文末の遂行的付加語句との共起可能性の微細な違いがある。

- (15) a. How mad he is, *I say/ *I tell you/ *I wonder/ *I ask you/ *I ask myself!
 b. Boy, is he mad, ??I say/ I tell you/ *I wonder/ ??I ask you/ *I ask myself!

ここでの付加語句は、基底の〈主張〉(ないしは〈陳述〉)、〈懐疑の表出〉、〈質問〉等の発語内効力がモダリティ化したものであり、発話の強意的な提示を行う役割を担っている (Davison 1975: 172, Bolinger 1977: 518, 河野 2002: 26-27 参照)。例文から見て取れるように、これらの付加語句はいずれも wh 感嘆文とは適合しない。倒置感嘆文もこれらのモダリティとの相性は良いとは言えないが、I tell you とはうまく適合するし、I say や I ask you と境界線上ではあるが一応許容されている。ところで、倒置感嘆文の中でも、否定倒置感嘆文は (15b) のような肯定倒置感嘆文よりもさらにこれらの付加語句との親和性に欠けることを示す事実がある。次の例を見られたい。

- (16) Boy, isn't he mad, *I say/ *I tell you/ *I wonder/ ??I ask you/ *I ask myself!

上の否定倒置感嘆文の強意的付加語句との親和性の度合いは (15a) と同等であるとみなして良いであろう。ここでは、否定倒置感嘆文には相手から肯定的な応答を引き出そうとする誘発的態度が伴うので、さらなるモダリティ表現の付加が忌避されるのであろうか。この点を明らかにするために、試みに間投詞の boy を削除した結果を吟味してみたい。

- (17) Isn't he mad, ??I say/ ?I tell you/ ?I wonder/ ?I ask you/ ??I ask myself!

明らかに、boy の削除は文末のモダリティ表現を伴う否定倒置感嘆文の容認可能性を高めるのに貢献している。そもそも boy は感嘆に内在する感情的スタンスの指標であり、否定倒置感嘆文の包含する誘発的態度とも付加語句の表す強意とも異なる伝達内容を表示するものであって、後二者と共起できな

い理由はないと思われる。しかし、発話態度の重層化には一定の歯止めがかかるのであろう。言うまでもなく、Boy は単独では Boy, isn't he mad! のように否定倒置感嘆文とは自由に結びつく。また、(17) で見たように、否定倒置感嘆文は概ね強意モダリティを受け入れる。しかし、間投詞 boy と強意モダリティの重層化は過重な情報内容となるものと推測される。このように、モダリティ表現が入り組んで発話態度があまりに屈折したものになると、聞き手には意図が適格に伝わりにくくなるであろうし、聞き手に不当な処理コストを課すことになるはずである (Sperber and Wilson 1986 参照)。

なお、興味深いことに、母語話者の判断に依れば、(15b) のような付加語句付き肯定倒置感嘆文については、boy の有無は容認可能性に影響を与えない。これは、否定倒置感嘆文とは違って、誘発的態度を伴わないのでその分だけ発話態度が単純化されているためであると思われる。しかしながら、それにもかかわらず発話の全体的な容認可能性が改善されないのは不可解と言うしかない。

倒置感嘆文と wh 感嘆文との差異を示す第四の性質として、第三の性質とも関連するが、付加疑問との共起可能性の微妙な違いがある。次の例を観察してみたい。

- (18) a. ??How mad he is, isn't he!³
 b. ?Boy, is he mad, isn't he!
 c. *Boy, isn't he mad, is he!

上に挙げたような逆極付加疑問 (すなわち主節と付加語句の極性が反転する付加疑問) は主節の伝達内容への同意を求める機能をもっている。瞠目すべき事態への話し手の感情的認定に関して相手の共感を得ようとする意図である。感嘆文においては、話し手は (場面の共有等を媒介にして) 同意ないしは共感が得られることを確信しているのが普通であるので、ここでの付加疑問の適切なイントネーションは下降調となる (河野 2001 参照)。このような機能と形式を備えた付加疑問と感嘆文の共起については、(18a) と (18b) は並行的に許容されるが (18c) は禁止される結果になっている。(18c) が不自然な発話になる理由は容易に推測できる。これは、付加疑問と否定倒置感嘆文が共に誘発的態度を表すためであろう。誘発的態度を表明するためには

Boy, isn't he mad! で十分であり、付加疑問は余剰となる。付加疑問が存在価値をもつのは、誘発的態度が顕在化しない、(18b) のような肯定倒置感嘆文や (18a) のような wh 感嘆文と共起する場合である。

2. 倒置感嘆文と修辞疑問文

見かけは疑問文の体裁を取りながら実質はそれとは異なる発語内効力をもつ発話として、倒置感嘆文と修辞疑問文を対比してみる価値がある。両者の例を次に挙げておく (但し、(19a)・(19b) は (1a)・(1b) の反復)。

(19) a. Is he mad!

b. Isn't he mad!

(20) a. Is it true? ('Surely it is not true.')

b. Isn't it true? ('Surely it is true.')

倒置感嘆文は疑問文の形式を借りて〈感嘆的主張〉を表すものであるが、修辞疑問文は疑問文の形式で質問への否定的な答えに相当する〈主張〉を表す。

そもそも、倒置感嘆文が基底に疑問文をもつとみなすべきか否かについては議論がある。統語的な振る舞いからは両者は別々のクラスに属すとされる (McCawley 1973)。しかし、機能的・語用論的性質からは〈感嘆的主張〉は基底の〈質問〉から派生したものであるとされる (Huddleston 1993, Goldberg and Giudice 2005)。河野 (2007) は後者の観点に立って、次のような分析を提案した。まず、倒置感嘆文は基底に話し手自身に宛てた問いをもち、さらに、その問いに対する話し手自身の答えが含意されていると措定した。こうして、例えば上の (19a)・(19b) の倒置感嘆文はそれぞれ次のように定式化される。

(21) a. i) Self-addressed question: <Is it the case that he is (so) mad?>

ii) Self-elicited answer: <Of course, it is.>

b. i) Self-addressed question: <Isn't it the case that he is (so) mad?>

ii) Self-elicited answer: <Of course, it is.>

自問部分については、肯定的な答えを引き出そうとする誘発的態度が伴うか

否かで否定倒置感嘆文 (19b) と肯定倒置感嘆文 (19a) の差が生ずる。しかし、自答部分は共に命題内容を肯定するものであり、差はない。要するに、異なるモードであえて自分自身に問いかける風を装い、結局は答えは問うまでもなく明らかなことを強意的に提示する発話の方略であるといえる。なお、誘発的態度は話し手の自問自答のなかで作用するものではあるが、誘発的質問の根拠となるべき、聞き手との何らかの共有化された(ないしは共有化されているとみなしうる) 想定を必要とする。従って、例えば (19b) では命題内容の 'that he is (so) mad' が相手と文脈的に共有されていることが重要である。一方、(19a) では命題内容は聞き手にとって唐突で新奇なものであってもさしつかえない。

修辞疑問文も並行的な特徴付けが可能である。修辞疑問文も倒置感嘆文と同様に、基底の話し手自身に宛てた問いと、その問いに対する話し手自身の答えが介在するとみなし得る。こうして、例えば上の (20a)・(20b) の修辞疑問文はそれぞれ次のように定式化される。

- (22) a. i) Self-addressed question: <Is it the case that it is true?>
 ii) Self-elicited answer: <Surely it is not the case that it is true.>
 b. i) Self-addressed question: <Is it the case that it is not true?>
 ii) Self-elicited answer: <Surely it is not the case that it is not true.>

すぐに気付くように、倒置感嘆文では肯定的な想定(すなわち命題)を自ら承認するプロセスを踏むのに対して、修辞疑問文では肯定的ないしは否定的な想定を自ら却下する形をとる⁴。想定が真か偽かが話し手・聞き手の双方にとって自明な文脈で、あえて問うまでもない質問を提示して、その想定を打ち消すのが修辞疑問文の機序である。修辞疑問文は、そもそもそのような真偽が自明な想定を抱くこと、そしてそのような質問をわざわざ行うことが見当はずれな行為であることを伝えたいのである。表出された想定とは逆の命題を主張する点で、修辞疑問文はアイロニーと軌を一にするものである。(アイロニーは、例えば、You are a genius のような発話で You are a fool のような主張を表すものであった。)

このように、倒置感嘆文も修辞疑問文も基本的に自問自答に基盤を置く。

自問自答である限り、話し手は相手からの答えを期待している訳ではない。もちろん、聞き手は含意された話し手の主張に自発的に共感・反感ないしは同意・不同意を表明することは自由である。しかし、もともと答えが自明な問いであるから、答えは求める必要はない。ただ、話し手は自ら答えを提示することがある。Wierzbicka 1991 の挙げる次のような例を見てみたい。

- (23) Wasn't that funny? That was the funniest thing I've ever heard.
(Buzo 1974: 114, cited in Wierzbicka 1991: 46)

ここでは、答えを顕在化することによって、引き金の問いは正真正銘の質問になっている。答えが含意されるだけであれば、問いの発話は疑問符ではなく感嘆符が付けられるであろう。

倒置感嘆文の起源を修辞疑問文に置く考えは Goldberg and Giudice 2005 によって共有されている。(但し、彼らがそれを通時的起源とみなしている点については、ここでは不問にしておきたい。) 彼らは、付加語句の 'or what?' が本来の疑問文を「修辞疑問文」に変える働きをもつことに着目し、この点に関して通常の疑問文と倒置感嘆文は同様に振る舞うことを述べている。

- (24) a. Do you want to go? (request for information)
b. Do you want to go or what? (rhetorical question: it is assumed that you want to go)
(25) Boy, are you tired or what?! (exclamative with rhetorical question tag) (Goldberg and Giudice 2005: 420)

確かに、(24a) では聞き手への質問 (つまり情報提示の依頼) になっているが、(24b) では 'or what?' の付加に伴って自分宛の質問になっている。(25) の倒置感嘆文においては、本来自分宛の質問である倒置感嘆文にそのようなことを表す明示的な標識が現れたに過ぎない。ここで注意しておかねばならないのは、(24b) も (25) も共に話し手の想定 (すなわち、引き出される答え) は肯定的内容であることである。(24b) は確かに自問自答ではあるが、一般の修辞疑問文のように質問への否定的内容を想定しない。一般の修辞疑問文では主張 (ないしは命題内容) が自明であることが伝えられるが、(24b)

のような類の疑問文においては「いらだち」のようなより感情的な色合いが濃い態度が表される。感情的負荷が際立つことで、倒置感嘆文（ないしは感嘆文一般）と近似するものであると言える。

倒置感嘆文と修辞疑問文との差異を明らかにするために、最後に、前節で取り上げた遂行的付加語句との共起を観察しておきたい。倒置感嘆文（及び wh 感嘆文）(15)～(18) と次の修辞疑問文とを比較されたい。

(26) Is/Isn't it true, ?I say/ I tell you/ I wonder/ I ask you/ I ask myself?

(27) a. *Is it true, isn't it?

b. *Isn't it true, is it?

倒置感嘆文（及び wh 感嘆文）においては、モダリティ化した発語内行為を表す付加語句との共起は全体的に思わしくなく、かなり限定がきつかったが、修辞疑問文においてはほとんど完璧に自然である。興味深いのは、モダリティが話者指向の I wonder や I ask myself に留まらず、聴者指向の I say, I tell you, I ask にも及んでいることである。修辞疑問文は第一義的には自分宛の質問であるが、二義的には相手への問いかけになっていると解せる。但し、相手への問いかけはポーズであって、返答を期待している訳ではない。また、(27) が示すように、修辞疑問文は付加疑問と馴染まない。実のところ、疑問文はおしなべて逆極付加疑問を受け入れないという事実がある (Bolinger 1989: 124)。付加疑問の極性は統語的制約によって主節の疑問文に呼応しなければならないが、これだと意味的には質問内容そのものないしは質問を掲げることへの相手の同意を求めることになる。これでは、修辞疑問文の趣意である強意的な否定的主張は素通りされてしまう。中心となる主張について単刀直入に相手の同意を得たいのであれば、話し手はむしろ平叙文を用いて主張を全面に押し出す方法を選ぶべきであろう。質問は主張を間接的に表すことしかできないから、疑問文には付加疑問は和合しないのである。

3. 結論

倒置感嘆文は〈質問〉と〈感嘆的主張〉の間を揺れ動く表現形式である。倒置感嘆文はプロトタイプ感嘆文と基本的な性質を共有する一方で、埋め込

みや間投詞・文末の遂行的付加語句・付加疑問との共起について微細な差異を示す。また、倒置感嘆文は、第一義的に、自問自答のプロセスの中で、自明な事柄をあえて問い、想定する答えに相手の注意を向けさせようとするものである。修辞疑問文も否定的な答えを想定にもつ点を除けば倒置感嘆文と通底する発話生成メカニズムから成る。英語において、倒置感嘆文は有標構文の一つであるが、〈質問〉から〈感嘆的主張〉への揺らぎは語用論的普遍性をもつと推測される。現に、英語と類型を異にする日本語においても、(いささか芝居がかったもの言いではあるが)「この季節外れの暖かさはどうだ!」のような問いと感嘆が相半ばする形式が用意されている。

注

- 1 本論での例文の容認可能性判断は、参考文献から引用したものを除いて、Ronald W. Thornton 氏に負っている。以下、氏の判断が関わる例文番号・記号は太字で表記する。
- 2 倒置感嘆文の埋め込み条件の厳しさは次のような例でも明らかである。
 - i) a. ??John knew that boy, were we in trouble. (Green 1976: 388)
 - b. ??I know that boy, are we in for it.
 上位節の主語が一人称以外であったり、主節の動詞が現在時制であったりすると、容認可能性が下がる。また、主節の動詞も極めて限定されている。
 - ii) ?I tell you that boy, are we in for it.
 - iii) a. *I'm amazed that boy, are we in for it.
 - b. ??I was amazed that boy, were we in for it.
 倒置感嘆文の埋め込みは、(9b) のような話し手が感嘆の経験内容を回顧する文脈や、ii) のような最も一般的な伝達動詞を伴う場合以外には起こりにくいと思われる。iiib) では、過去時制のおかげでわずかながら許容度が上がっている。
- 3 Huddleston and Pullum 2002 は、(18a) と並行的な次の文を完全に容認可能であるとされている。
 - i) What a disaster it was, wasn't it! (Huddleston and Pullum 2002: 922)
- 4 容易に気付くように、否定修辞疑問文の自答 (22bii) は否定命題の否定であるから、真理命題的には肯定命題 'It is the case that it is true' と等しい。したがって、一般的な否定疑問文が誘発的に肯定的命題内容を想定するのと結果的に同じになる。否定修辞疑問文が一般的な否定疑問文と矛盾しないように作られていることは興味深い。

参考文献

- Bolinger, D. 1977. Another glance at main clause phenomena. *Language* 53, 511-519.
- Bolinger, D. 1989. *Intonation and its uses*. Stanford: Stanford University Press.
- Davison, A. 1975. Indirect speech acts and what to do with them. In Cole, P. and J. M. Morgan, eds., *Syntax and semantics 3: Speech acts*, 143-185. New York: Academic Press.
- Fillmore, C. 1998. Inversion and construction inheritance. In Webelhuth, G., J-P. Koenig, and A. Kathol, eds., *Lexical and constructional aspects of linguistic explanation*, 113-128. Stanford: Stanford University Press.
- Goldberg, A. and A. del Giudice. 2005. Subject-auxiliary inversion: a natural category. *The Linguistic Review* 22, 411-428.
- Green, G. 1976. Main clause phenomena in subordinate clauses. *Language* 52, 382-397.
- Huddleston, R. 1993. On exclamatory-inversion in English. *Lingua* 90, 259-269.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 河野 武 2001. 「付加疑問文の関連性モダリティ」, 『大妻女子大学 (文系)』第 33 号, 75-89.
- 河野 武 2002. 「付加的〈質問〉のモダリティ」, 『21 世紀の英語教育への提言と指針——隈部直光教授古稀記念論集』, 23-31. 東京: 開拓社.
- 河野 武 2007. 「倒置感嘆文のモダリティ」, 『大妻レビュー』第 40 号, 69-81.
- McCawley, N. A. 1973. Boy! Is syntax easy! In Corum, C., T. C. Smith-Stark, and A. Weiser, eds., *Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 369-377.
- Michaelis, L. A. and K. Lambrecht. 1996. The exclamative sentence type in English. In Goldberg, A. E., ed., *Conceptual structure, discourse and language*, 375-389. Stanford: Center for the Study of Language and Information Publications.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Sadock, J. M. and A. M. Zwicky. 1985. Speech act distinctions in syntax. In Shopen, T., ed., *Language typology and syntactic description*, 155-196. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell.
- Wierzbicka, A. 1991. *Cross-cultural pragmatics: the semantics of human interaction*. Berlin: Mouton De Gruyter.
- Zanuttini, R. and P. Portner. 2003. Exclamative clauses: at the syntax-semantics interface. *Language* 79, 39-81.